

文化芸術により子供たちの能力 を引き出すための取組について

1. 文化庁主催シンポジウム

「アートで子供たちの才能を引き出す」(平成25年7月16日)

2. 文化芸術による子供の育成事業

3. 大学を活用した文化芸術推進事業

平成25年9月24日

文化庁文化部芸術文化課



シンポジウム

アートで子供たちの 才能を引き出す

～文化芸術によるファシリテーションの在り方を考える～



日程

平成25年 **7月16日** 火

14:00～17:30 (13:30開場)

会場

政策研究大学院大学 そうかいろう 想海樓ホール
東京都港区六本木7-22-1

主催

 **文化庁**
AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

定員

300名 (先着順)

参加費

無料

お問合せ

文化庁文化芸術文化課文化活動振興室

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2 / TEL 03 (6734) 2835 / FAX 03 (6734) 3816 / E-mail: sinkou@bunka.go.jp

シンポジウム

アートで子供たちの才能を引き出す

美術や舞台芸術、伝統芸能などの文化芸術は、教育現場において子供たちの創造性やコミュニケーション能力等を育む上で有効であり、自らを律しつつ他人とともに協調し他人を思いやる心や感動する心など子供たちの豊かな人間性を育て、ひいては子供たちの「生きる力」を高めることに大きく貢献します。

このシンポジウムでは、文化芸術と教育に関わる有識者が集まり、教育現場における文化芸術の現状について話し合うとともに、教育において文化芸術が果たす可能性や、ファシリテーターの活用など今後の在り方について考察します。

プログラム

14:00 開会挨拶・趣旨説明

14:10 事例発表 [発表予定者]

[日本フィルハーモニー交響楽団「音楽の森（エデュケーション・プログラム）」の取組]

富樫 尚代 (日本フィルハーモニー交響楽団 音楽の森 部長)

[「旅するムサビ」の取組]

三澤 一実 (武蔵野美術大学教授)

[東京都美術館 × 東京藝術大学「とびらプロジェクト」の取組]

伊藤 達矢 (東京藝術大学美術学部特任助教、とびらプロジェクトマネージャ)

稲庭 彩和子 (東京都美術館学芸員、アート・コミュニケーション担当係長)

[「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」の取組]

小川 智紀 (横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局長、NPO法人STスポット横浜 副理事長)

15:10 ~休憩~

15:30 パネルディスカッション [出演予定者]

モデレーター

熊倉 純子 (東京藝術大学教授)

パネリスト

伊波 睦 (日本フィルハーモニー交響楽団 トロンボーン奏者)

福 のり子 (京都造形芸術大学教授・アート・コミュニケーション研究センター所長)

小野木 豊昭 (伝統芸能プロデューサー (古典空間 代表))

堤 康彦 (NPO 法人 芸術家と子どもたち 代表)

中村 晃 (水戸芸術館音楽部門芸術監督)

17:30 閉会

※プログラムは予告なしに変更する場合があります。

参加申し込み方法

メール
の場合

件名を「7/16 シンポジウム「アートで子供たちの才能を引き出す」申込」とし、「お名前、団体名・御所属」を記載の上、sinkou@bunka.go.jp までお送りください。

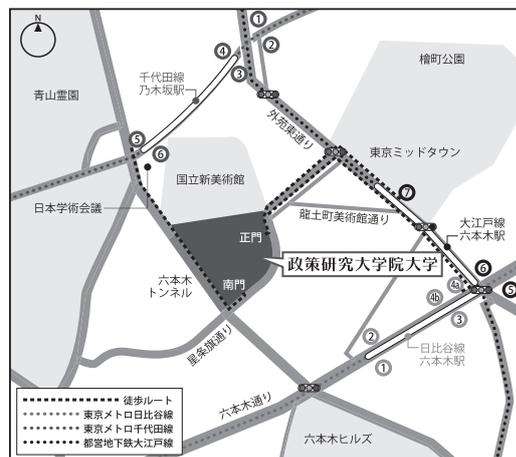
ファクシミリ
の場合

下記の参加申込書に必要事項を記載の上、
03-6734-3816 までお送りください。

申し込み先

文化活動振興室事業支援係

「お申し込みいただいた後の確認の御連絡・参加証等の発行はありません（御参加いただけない場合のみ、御連絡いたします。）。」



※駐車場はございません。

シンポジウム「アートで子供たちの才能を引き出す」参加申込書

●お名前	●団体名・御所属
●御連絡先（電話番号／ファクシミリ／メールアドレス）	

シンポジウム「アートで子供たちの才能を引き出す」について

1. 事例発表について

- 日本フィルハーモニー交響楽団 音楽の森 部長 ^{とがしひさよ} 富樫尚代氏
「音楽の森エデュケーション・プログラム」の取組(日本フィルハーモニー交響楽団においてファシリテーションを取り入れた教育活動を実施)
- 武蔵野美術大学教授 ^{みさわかずみ} 三澤一実氏
「旅するムサビ」の取組(武蔵野美術大学の教職課程の学生中心に、対話による鑑賞授業やワークショップ形式の授業、学校での公開制作などを展開)
- 東京藝術大学美術学部特任助教 ^{いとうたつや} 伊藤達矢氏、東京都美術館学芸員 ^{いなにわさわこ} 稲庭彩和子氏
「とびらプロジェクト」の取組(東京都美術館と東京藝術大学が共同して、美術館を拠点にアートを介したコミュニケーションを促進する様々な活動を展開)
- 横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局長 ^{おがわともり} 小川智紀氏
「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」の取組(横浜市において様々な団体等と連携して芸術文化教育プログラムを推進)

2. パネルディスカッションでの主な意見

(ファシリテーターの養成等について)

- ファシリテーターとなるアーティストには資質が必要で、育てるのは難しい。創造活動自体がクリエイティブで、子供と向き合うということに興味を持ち、かつ、ある程度コミュニケーションがとれるようなアーティストを常に探しているが数は少ない。
- ファシリテーターは、アーティストだから、先生だから、キュレーターだからできるというのではなく、ある程度のトレーニングが必要である。
- アーティストも、自分の作品を言語化して誰かに伝えるというトレーニングをしないと世界では仕事をしていけない。ファシリテーションを学ぶことは、そのトレーニングにもなる。

- ファシリテーターの養成については、日本では分野によって非常に違いがある。美術分野では、作り手ではなく、ファシリテーションを専門にするような人材を大学で育てている。一方、伝統芸能を含めた実演芸術分野、例えば音楽学部のある大学では、音楽家がファシリテーターになれるよう、ワークショップの作り方などを教える授業はまだなく、古典的な意味での実演家を目指す教育で手一杯という状況ではないか。

(ワークショップの在り方等について)

- ワークショップを行う上で一番大事なことは、子供に教えるのではなく、子供たちの自主性を引き出すため、我慢をして話し合いが上手くいくように持っていくことである。
- 現在、学校現場で求められているワークショップには大別すると二つのタイプがある。
 - 一つ目は、芸術体験を通じて子供たちが芸術に親しむ、情操教育的に子供たちにとって良い影響を与える、といった意味の「潤い型」ワークショップであり、非常に数が増えてきている。
 - 二つ目は、自己肯定感が低かったり、他者との関係を作るのに困難を抱えているような子供たちに、芸術体験を通じて自己肯定感を高めてもらう、といった意味の「切実型」ワークショップであり、このタイプのものがまだ足りない。
- 公的資金を注入するにしても、単にワークショップの数を増やせば良いというのではなく、どんな子供たちに対してどのような体験をさせるべきなのか、ということを経略的に考えて実施する必要があるのではないか。
- 学校では、授業日数に制限がある。芸術団体としてはワークショップの実施時間を3時間くらい確保してほしいとが、学校ではそこまでは難しく、そこに現在の教育現場における一定の限界を感じる。
- 本当に「生きる力」を身につけてもらうため、ワークショップ後の子供たちの芸術的な体験の中で、どのようにしてその成果を継続的に生かしていくことができるのかが大きな課題である。
- 劇場、音楽堂等が行うワークショップの最大のメリットは、最後にホールで発表会ができるということである。
- 音楽を聴いて絵を描くなど、ジャンル横断的な取組を行っていくことで、よりダイナミックな芸術を通じての教育活動ができるとよい。

文化芸術による子供の育成事業

(新規)
26年度要望額 6,261 百万円

文化芸術は、子供たちの育成に大きな力となる。

- 一流の文化芸術団体や芸術家による質の高い様々な文化芸術を鑑賞・体験する機会を提供することは **子供たちの豊かな感性・情操や、創造力・想像力を養う**上で大きな効果。
- 芸術家を教育現場に派遣して行う対話や創作、表現に係る体験活動は、**子供たちの思考力・判断力・表現力等の向上や、自己肯定感、社会性、責任感等の育成**に大きな効果。

- 義務教育期間中の子供たちに対し、国として、質の高い文化芸術に触れる機会を、2回（「現代実演芸術」「伝統芸能」各1回）提供する。【平成26年度】（平成25年度は1.8回）
- 将来的には、地方自治体の自主事業等も含め、義務教育期間中毎年1回は、文化芸術の鑑賞・体験ができる環境を整えることを目指す。【平成32年度】（国：義務教育期間中3回、都道府県・市町村：同6回）

1 巡回公演事業

- 国が一流の文化芸術団体を選定し、小学校・中学校等において実演芸術公演を実施。
- 事前に児童・生徒が自ら参加する体験型の活動（ワークショップ）を実施。
- 合同開催を奨励し、効率的により多くの児童・生徒に実演芸術の鑑賞・体験機会を提供。

- 公演種目 14 種目
- 巡回公演数 1,900 公演程度



2 芸術家の派遣事業

- 個人又は少人数の芸術家が学校を訪れ、講話、実技披露、実技指導を実施。
- 国、教育委員会と地域のNPO法人等が連携し、学校と芸術家個人や小規模グループをコーディネート。

- 学校公募型 1,400 件程度
- NPO法人等提案型 1,000 件程度



3 コミュニケーション能力向上事業

- 学校において、芸術家による表現手法を用いた計画的・継続的なワークショップ等を実施。
- 芸術家による実技披露に加え、児童・生徒が小集団で協働して、課題解決に取り組む活動を実施。
- 創作や小集団での話し合い等のプロセスを重視。

- 学校公募型 100 件程度
- NPO法人等提案型 100 件程度



豊かな創造力・想像力を養う

思考力やコミュニケーション能力など
社会人としての素養を身につける

将来の芸術家や観客層を育成し、
優れた文化芸術の創造につなげる

「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」 〈実施例〉

以下に紹介する事例は、参考例として、本事業を活用して実施した例の一部を掲載します。本事業では、地域や学校、児童生徒の実態等を踏まえ、各教科等の目標や内容との関連を図り、外部講師の専門性を生かした創意工夫あるワークショップの実施が考えられますので、以下に掲載する事例以外にも様々な取組が期待されます。

事例1（小学校）

〈対象児童生徒〉3～6年生
〈実施教科等〉総合的な学習の時間
〈実施分野〉演劇 〈実施回数〉3回

〈実施内容〉

児童相互のコミュニケーションを円滑にそして豊かなものにするために身体表現を含めた創作ワークショップを行った。

初回は、導入として簡単な身体表現による創作を行い、創作の基礎の体感的理解をねらいとし、グループ単位で身近な「場所」を身体で表現し、互いに鑑賞をした。その後、ふりかえりとして難しかったこと、楽しかったことについて発表を行った。2回目は少人数グループに分かれて、カードに書かれた言葉でテーマに関する詩を推敲しながら作り、その出来上がった詩を身体表現に置き換えた。これを各グループで発表、互いに鑑賞をし、振り返りを行った。3回目はグループごとにカードに書かれている登場人物の行為やせりふ、場面の状況などを、表現し、振り返りを行った。



〈実施の効果〉

課題を乗り越えることに対して、全体で助け合うという様子が見られ、児童同士の関係性がよりよいものになった。また、聞く態度にも変化が見られた。非常に高い集中力を長時間保持できるようになった。さらに、詩の創作過程で、推敲という過程をじっくり体感したことで、誤字脱字の修正にとどまらない、推敲に取り組む姿勢が見られるようになった。

事例2（小学校）

〈対象児童生徒〉4年生
〈実施教科等〉社会
〈実施分野〉演劇
〈実施回数〉3回

〈実施内容〉

人の発表を聞く力や姿勢に課題がある児童たちに、その解決策の1つとして、調べたことを劇で表現して伝え合う創作ワークショップを行った。

社会科の学習として「下水処理の様子」を調べ、分かったことや考えたことを伝え合う方法として、身体表現による劇化を取り入れた。まず、調べたことについてグループごとに話し合いをしながら全体をまとめ、その中から見学活動や取材活動の中で印象に残った一場面を選んだ。その場面を詳しく思い起こしたり、見学・取材メモを活用したりしながら、劇の大まかな台本や台詞、動作などを創作した。

担任教諭や講師の指導のもと、グループ内で活発に意見交換や練習を行い、協力して作り上げることができた。互いの劇を鑑賞した後は、発表された内容についての意見はもとより、劇化で難しかった点をふり返ったり、よかった点について感想を伝え合ったりした。



〈実施の効果〉

劇の創作過程でのお互いの苦労や工夫に気付いていたためか、友だちの発表を聞く力や姿勢に大きな変化があった。演じる側も照れを乗り越えて勇気をもって演じることができ、表現することへの意欲の高まりも見られた。

また、取材活動など人が登場する場面を選んで、様子の伝え方を考え、働く仕事の大変さや取材に応じてくれた担当者の優しい受け答えなどを再現したことで、下水処理の仕事に従事する人々の工夫や努力についての理解を深めることができた。

事例3（小学校）

《対象児童生徒》5・6年生 《実施教科等》国語
《実施分野》演劇 《実施回数》5回

《実施内容》

川柳をつくり、それを基に身体表現の創作を行う。身体的に言葉を発することを学び、川柳をつくることを通し、ことばと詩的表現に対する理解を深め、創作を通じた、ディスカッション能力、コミュニケーション能力の育成をねらいとした。

川柳については、専門家を招き、地域の人たちの協力を得て川柳づくりから鑑賞までを句会の形式で実施した。句会で作られた作品の中から幾つか選んで、川柳を身体で表現するパフォーマンスの創作をグループで行った。創作は児童たち自身で句の鑑賞を基に作品づくりを行っていく形式を取り、児童たちがグループごとに課題を乗り越えていくことで、創作過程を充実させ、共同作業を体験できるようにした。



《実施の効果》

ワークショップでの各回での創作の過程ではグループでの協働を重視した結果、人の意見に耳を傾け、作品をよりよくしていこうという意欲が強くなると同時に俳句や川柳の鑑賞力の向上も認められた。

他のグループの作品を「見ること」や、自分たちの作品を「見られること」で、自分の表現が受け入れられる喜びを知り、違う価値観や表現を受け入れることができるようになってきた。結果、外部の人に対しても自信をもって対応することができるようになった。

事例4（中学校）

《対象児童生徒》2年生
《実施教科等》国語・音楽
《実施分野》音楽
《実施回数》4回

《実施内容》

自分たちが生活している地域の好きなおとこや自慢できるものをグループごとに話し合い、その内容を生かして作詞をし、曲作りをした。その際、地域の方言を取り入れることで、地域の特徴を表現した。最後には地域行事の一つとして、地域の住民に、生徒が創作した歌を発表した。



《実施の効果》

生徒同士でコミュニケーションをとりながら、地域のよさや自慢できるところについてそれぞれの体験を基に話し合い、再発見をするなど、自分たちの思いや地域を振り返るよい機会になった。また、作詞の際に地域の方言を取り入れてつくったことも地域の特徴を再認識することにつながり、生徒の心に残った。

事例5（中学校）

《対象児童生徒》3年生 《実施教科等》国語
《実施分野》演劇 《実施回数》3回



《実施内容》

「敬語ワークショップ」として、敬語を使う場面を考えながら、演劇を創作し、発表を行った。

初回は敬語が必要な場面を考えることを中心に、グループごとにアイデアを発表し、各グループが創作する場面を決めていった。2回目は初回で行った場面創作の基本を生かして実際に場面を作り、相互に鑑賞することを行った。敬語の日常的な用途について体感的に理解するとともに、グループ内での意見交換を通して、各自が居場所を見付け周囲とのコミュニケーション能力を向上させた。3回目は2回目のブラッシュアップを行い、振り返りとして、創作の中で難しかったことや楽しかったことを発表した。

《実施の効果》

初回はひっこみがちな生徒も多かったが、2回目の発表の時には物怖じせずにしっかり発表をしていた。また、より質を上げていきたいという意志も垣間見えた。敬語についても、敬語使用の心の在り方を体感的に理解できていた。

講師からの細やかな声かけと毎回の振り返りの中で、最初は硬かった生徒たちの表情がゆるみ、色々想像をふくらませながら1つのシーンを創作していく姿に、普段の授業と違う生徒の一面を見ることができた。実際に体験したクラスは1クラスだったが、その後の授業に対する取組の積極性により変化が見られた。

事例6（特別支援学校(高等部)）

《対象児童生徒》全学年 《実施教科等》総合的な学習の時間
《実施分野》演劇 《実施回数》8回

《実施内容》

第1回～第3回【基礎編】 日常的な場面をモチーフとした簡単な脚本を基に、演劇(ミュージカル)をとおして、演技した時に感じた心の変化を自分自身で知ることや、自己表現することの楽しさを体験した。

第4回～第6回【応用編】 発声練習や本校で行うミュージカルの脚本を基に、脚本に沿った読み合わせ練習をし、表現方法や配役の気持ちを考えた演技を行うことで、気持ちの伝え方や台詞の間の取り方、台詞のキャッチボールができるように取り組んだ。発表した後は振り返りを行い「感じたこと・気づいたこと・疑問に思ったこと」などを発表し合い「共有体験」をしながらコミュニケーション能力を高めていった。

第7回～第8回【実践編】 コミュニケーション能力を学び高めた基礎を基に社会生活でのマナーを中心にした取り組みを実施した。他者とのかかわりを示した場面のロールプレイングを中心に行うことで、コミュニケーションの取り方や適切なマナーについて体験的に学んだ。

《実施の効果》

身体活動・台詞表現や歌唱トークの体験をとおして、全員で場の雰囲気盛り上げ、時間を共有する楽しさを味わうことができた。また、一人ひとりの個性を生かした自己表現をしたり、コミュニケーションすることの楽しさを味わうことができた。「楽しかった、面白かった」と述べる生徒が多かったので、自己表現しても受け入れられるという安心感が、自信や自己肯定感を高めることにつながった。

大学を活用した文化芸術推進事業

(25年度予算額 450百万円)
26年度要求額 650百万円

目的

我が国の文化芸術の一層の振興を図るため、芸術系大学等の有する教員、教育研究機能、施設・資料等の資源の積極的な活用を図る。

事業内容

①アート・マネジメント人材の育成

多様な文化芸術活動を支援する高度な専門性を有したアートマネジメント（文化芸術経営）人材について、作品を鑑賞する者と作品をつなぐ「対話型鑑賞」を提供するファシリテーション能力や実践的能力の向上等を含めた養成を推進するため、芸術系大学等による公演・展示等の企画・開催も含めた実践的なカリキュラムを開発・実施を支援するとともに、開発されたカリキュラムを広く他大学等に周知・普及させる。

②大学の文化芸術に関する魅力発信

大学が文化芸術に関して有する人材、施設、設備、資料等の様々な資源に関するデータベースを作成・公開するとともに、大学の文化に関する魅力を広く発信するシンポジウムを開催する。

支援件数：20大学→30大学程度

